

講演録

平成30年度 公開講座

「不登校の子どもの気持ち・親の気持ちとその支援」

日時：平成30年7月14日（土）

講師：伊藤 美奈子 先生（奈良女子大学大学院生活環境科学系 教授，奈良女子大学臨床心理相談センター長）

会場：京都女子大学 J 校舎 5 階525教室

こんにちは。いまご紹介いただきました伊藤です。今日はゆったりと3時間ほど時間がありますので、私もいろいろ不登校の子どもたちとの出会いとか、エピソードとか、いろいろご紹介しながらお話ししたいと思っておりますので、皆さんもあまり硬い感じにならずに聞いていただけるとありがたいと思います。私の話は、たぶんそんなに難しいお話にはならないんじゃないかと思っておりますので、むしろ身近にいらっしゃる子どもたちとかを頭に置いていただきながら聞いていただけるといいかなと思っております。

なぜ不登校なのかというところを少し最初にお話ししておきたいと思っております。私は、もともと国語の教員として、女子高校で6年間教員をしたのですが、その中で担任をしていたクラスの生徒に不登校の子がいました。当時は、登校拒否と呼んでいましたが、その子と出会う中でその子の気持ちがよく分からなかったんです。対応も十分にできなかったこともありまして、そのときに勉強をし直そうと思って研修を受けたのが、カウンセリングとか、教育相談でした。生の生徒たちを目の前にしながらもう一度勉強をすると、また違った吸収の仕方もあり、教員としてもカウンセリングの勉強がすごく生きるということが分かりまして、一から院に入り直して勉強をしたというのが自分の出発点です。

ですから、私自身は学校現場が原点です。自分は教育畑から出ましたし、教師という立場で最初スタートしましたので、学校のために何かできないのかなというところで、不登校とか、いじめとか、あるいはスクールカウンセリングとかを研究しています。今日お話しすることは、多くはそういう実践の中で出会った子どもたちのことです。そして、調査研究としてやってきたデータも少し後半でご紹介したいと思っております。

最初に、レジュメに『不登校の子どもたちがなぜ行けないのか、その理由は分からない』と書かせていただいています。文科省のデータとか、いろんな調査を見ると、友だち関係とか、個人的な性格とか、家庭の問題とか、いろいろ言われているかと思っております。実際には、不登校の子たちと面談をしたときに、「どうして学校がしんどいの」とか、「何か理由があったの」と聞いたときに、はっきり「これこれです」、「こういう理由があるんです」と言える子の方が少なかったという印象です。だいたいの子は、何で分からない。「分からないけども、学校に行こうと思ったら、しんどくなるんです」とか、「教室にいると水槽の中に入ったような気分になります」と。「水槽の中って、息ができないってこと」と聞いたら、そういう苦しい状況にありますと言ってくれた子もいます。「何で」

と聞いても、それは言葉にならないことがすごく多いというのが実感です。

でも、私たちはやっぱり理由が知りたいですよ。私も最初は絶対に聞きます。不登校の子と面談をするときも、初回は「何かあったん」とか。いじめがあったら学校にも協力してもらわないといけないし、解決すべきことはしたいから、最初は聞くのですが、「やっぱり分からない」、「自分でも言葉にならない」ということがあると、もうそれはいったんふたをして置いておくというかたちで、そこはそれ以上掘り起こさないということが多くです。なぜ掘り起こさないかといいますと、理由を聞かれることは、ある意味すごくしんどいことです。私たちは悪意で聞いているのではなく、何か理由が知りたい、訳があるんだったら解決したいというところで一生懸命聞くのですが、聞かれる方からすると、自分でも分からないところを「どうして行けないの」、「何で来ないの」と何度も何度も聞かれると、すごく追い詰められていくんですね。かつ、自分が何か人には分からないようなことをしてしまっているのかなとか、理由が言えないと駄目なのかなとか、逃げられないのかなとか、そんなふうにとんどん追い詰められていってしまうことはありますね。聞く側は、先生にしてもカウンセラーにしても親御さんにしても、「教えて」、「何でなの」というふうに聞いていると思うのですが、やはり聞かれる方からしたら追い詰められてしまうとか、答えるのがしんどいとか、そんな簡単には言葉にならないんだと感じている子もいるんじゃないかなと思うんです。私がもし誰か不登校の子に「何で」と聞いたときに、答えが返ってこなかった。そうしたら、そうなんだと、そこは流します。そして、いったんもうそこは保留にして、あえてそこは掘り起こすことはしない。何日、あるいは何か月か経ったときに、その子が自分で語ってくれたら、そこはもちろん一緒に考えますけれども、今聞ける問題じゃないんだなというところで、括弧に入れます。「それだったら何も解決にならないんじゃないか」、「ちゃんと問題を

を解決して分析しないといけないのでは」という見方もあると思います。もちろん、それも一つの大事な見方かと思うのです。

ここで一つ事例を挙げておきます。私が出会った不登校の中3の女の子がいるのですが、まずお母さんの相談を受けました。お母さんのお話では、部活の人間関係がこじれて、嫌な目を経験して不登校になったということでした。なので、部活の人間関係が原因なんだなというのは頭の隅っこに置いて、実際その子に会ってみたんです。私がざらっと「何かしんどいことがあったのかな」と聞いたのですが、その子自身の口からは部活のことは一切語られなかったんです。あまり聞いてもしんどいかなと思って、その子にどんなことが好きなのか聞いたら、当時流行っていたK-POP。韓国の歌手がその子は大好きで、そのお話がずいぶん出てきました。半分ぐらいはK-POPの話です。「誰それがいい」とか、「こんな歌があるんだよ」とか、一緒に二人で聞いたり、雑誌を見たりしたこともあります。だいたい週に1回相談室に来てくれて、お話をするという関係が続いていたんですが、半分がK-POPの話、そして、あとの半分は、その子は中3でしたから、来年の進学先ですね。これから進路をどうするという、すごく現実的なお話をしていました。そういうかたちで毎週お会いして、ほとんどその二つの話で1年間来たんです。何も原因とか、問題解決には至らなかったと思います。自分の中でも、あのことはどうなったかなと思いながらも、その子自身は来年度行く学校を決めて、4月から新しい学校で再スタートしようというところで、最後の回となりました。もう来週卒業式、今日で最後やねというときに、その子と1年間の総まとめをしました。「こんな話をしてきたね」、「4月からは高校生だね」と話して、「もうこれでさよならだね」と。本当に最後の最後のときに、その子がぼろっと一言、「先生、人間関係って難しいですよ」と言って、そして帰っていったんですね。ここで出たかという。たぶん、その子にしたら、人間関係のしんどさというのが、

不登校のスタートラインにあって、それをずっと抱えてきたんだと思うんです。でも、そこはあえて出さなかったんですね。そして、最後の最後、つまり、そこで言っても私は何も掘り下げられないし、そこから話は展開できないんですね。でも、最後の最後で、「人間関係は難しいですね」と言って、その子は卒業していきました。問題解決には至らなかったけれども、それを自分の心の中にしっかりと抱えながら次の新しい生活に巣立っていくという在り方もありなんだというのを学ばせてもらいました。その子は、夏休みに、何かの合宿で、どこかの山の中に来ていますという、簡単なはがきをくれたので、たぶん高校に行ってからには頑張っ、休まずに行っているのが分かりました。

不登校の理由は分かった方がもちろんいいし、解決できたらそれはそれで大事なことです。でも、理由が分からないと進めないとか、理由を明らかにしないと何も動かないとか、そんなこともないかなということ、さらには答えたくない、考えたくない、言葉にならないというときに、その理由を何度も何度も聞いてしまうと、聞かれた方にしたら、少ししんどい状態になることもというのが最初に話したかったことです。

『14歳』という、千原ジュニアさんが書かれた本があります。この方は、不登校をしておられたんです。京都のご出身で、割となじみのあるタレントさんかと思うのですが、ずっと引きこもっておられて、お父さんやお母さんとものごく壮絶な、家庭内暴力的な展開もありました。そのすごくしんどいさなかのことを、ご自身で言葉にされているんです。例えば、親御さん、特にお母さんが理由を聞いて、どんどん追い詰めてしまっているときの記述があります。そこを上手に切り取れるかどうか分からないのですが、読んでみたいと思います。しばらく自分の部屋に引きこもっていたジュニアさんをお父さんが引っぱり出してきて、お父さんとお母さんで説教をする場面です。説教というのは言い過ぎかもしれないのですが、「教えてくれ」と話をさせられるところなんですね。少し読ん

でみますね。

お父さんが座れと言った。お母さんがじっと僕の顔を見ている。僕は何も話すことはないと言った。早くこの場から逃げ出したかった。早く部屋に戻りたかった。お母さんがしゃべり出した。言葉の一つ一つにすごく気を使いながら。「なぜ学校に行かないの」、「なぜ部屋から出てこないの」、「何をしたいの」、「何がしたいの」、「何をしてるの」、「何が出来るの」。僕は何も答えることはできなかった。ただ目を鋭くして二人を見つめることしかできなかった。ただお母さんの言葉は止まらなかった。そして言葉はだんだん鋭くなって僕に向かってきた。「もう限界」、「意味が分からない」、「この家にいるのが嫌なら出ていけばいい」、「できればそうしてほしい」、「全寮制の学校」、「変な名前の病院」、「社会」、「気が狂っている」、「なぜそんなふうになってしまったの」、「私たちのどこがいけなかったの」、「なぜ」、「どうして」。お母さん、違うんだ。僕がしていることはそんなことじゃない。僕はやり方が少し人と違うだけなんだ。もう少し。もう少し待ってください。

これは、この子が心の中でつぶやいている言葉です。言葉には出していないんです。

声にならないそんな思いで頭の中がいっぱいになった。もうこれ以上、感情が入るスペースはない。もう無理だ。ただお母さんの声は止まらなかった。そして白髪が増えたお母さんの目からたくさんの涙が流れ出した。僕はそれを見た瞬間、頭の中が空っぽになった。「あー」。僕は言葉にすることができない頭の中いっぱいの感情で壁に穴を開けた。その感情を手のひらに握りしめて。それを穴の中にもち込むように。お母さんは大きな声を出しながら、さっきよりも速いスピードで涙を流した。

そういう場面が続くのですが、子どもの気持ちも分かるし、親の気持ちもすごく分かります。

どうして、なぜというのは、やっぱり聞きたいですね。親として心配だから、何かしてあげたいから、何かこの子のためにできることがあったらというので聞いているわけですが、子どもからすると、それに対して答えが出ない。自分でも分からないというのが正解だと思うんですね。自分でもどう言っているか、自分にも説明できない。それを人に言えと言われても無理なんだよという、もうちょっと待ってくださいという、そういう思いがすごく出ている本だなと。全編を通して、ジュニアさんの追い詰められていく状況というのが、ものすごくリアルに書かれている本だなと思いました。追い詰められていく子どもたち、それをしちゃいけないと分かっているのに言ってしまう親御さんの気持ち、その両方がすごく重く、でも、かつ正しくというか、本当にリアルに書かれた内容だと思いましたので、今日はちょっと紹介してみました。学校に行く、行かない。それを支える。子どもたちもしんどいし、そのそばで、何とかしたいけど、どうにもならないという親御さんの気持ちも大変な状況だということを、最初にお話しさせてもらいました。

次に、『行けないことによるストレス』ということで、子どもたちの気持ちというのを少し、お話してみたいと思います。まず、学校に行っていないという自分の状況に対して、すごく自己否定になってしまう子が多いと思います。面談をしていますが、「どうせ僕なんか」とか、「私なんかに行ける学校はないです」とか、「いま行っていないんだから、高校に行ってもどうせ駄目だ」とか、そんなふうに、「どうせ」とか、「私なんか」と、すごく自分のことを否定した言い方をする子が多いなと思います。何もその子は悪いことをしていないんです。他の子と比べて、学校に行っていないというだけなのに、ここまで自分のことを低く、あるいは否定した言い方をしてしまうというのは、すごく辛い状況だということを、まず1点感じます。その結果、周りの人たち、特に親御さんの一言一句に過剰反応をしてしまう子も多いと思います。そこに

は、親御さんが大切だから、親が大好きだから見捨てられたくない。親に嫌われたくないという気持ちがある。例えば、私が思い出す子どもの言葉として、「家にいてしんどいことがあるんだ」と言うので、「何がしんどいの」と聞いたら、「お母さんのため息です」と言ったことです。たぶん、お母さんはその子のそばで、ため息をつこうと思ってついたわけじゃないと思うんです。でも、その子にしたら、「きっとお母さん、僕が不登校だから、お母さんは苦労して、あんなふうに、ため息をつくんだな」と。「お母さんを苦しめているのは僕だな」と、自分の不登校のせいだということかたちで、そのため息を受け止めてしまうことが多いんじゃないかなと思います。だからといって、ため息に気を付けましょうというわけではないのですが、自分が休んでいるせいで周りが苦労しているに違いないとか、何か自分が休んでいることをすごく必要以上に受け止めてしまう、考えてしまう子が多いんじゃないかなと思います。それは、ある意味お母さんを苦しませたくないという気持ちとか、お母さんに見捨てられたくないとか、そんな気持ちかもしれないですね。「家でお母さんがピシヤンと戸を締めたのが、すごくつらかった」というのを話した子もいました。たぶんそれも、お母さんは当て付けで締めたんじゃないと思うんです。時々勢い余って戸がピシヤンと締まることがあると思うのですが、そういうときにその子は、自分のことをお母さんは怒っているんだ、自分が休んでいるから、お母さんはきっと僕のことを嫌いなんだと感じたということです。それは客観的に見たら、そんなのは思い過ごしだと、そこまで考えなくてもいいのにと私たちは思うのですが、子どもからすると、それだけ親が大好きだから、親に嫌われたくないから、あるいは、親に苦労を掛けたくないからという気持ちも裏側にはきっとあるんだろうなと思います。

そういう状態から一步踏み出すのは、すごく勇気が要るわけなのですが、その一步踏み出すときのエピソードが「母の肩の線」というエピソード

ソードです。これも、子どもとお母さんの気持ち、感情というのが分かっていたかというので、簡単にご紹介したいと思います。中学校3年生の女の子で、中1ぐらいから不登校だったかな。もう2年越しぐらいで学校に行けていなかった子です。その子は、学校には行けていなかったのですが、相談室には来てくれて、時々お話を聞くという状況で進んでいました。中3になって、進路のこともあるし、「学校に行きたい」、「行かないと…」という気持ちになりかけていました。あるとき、気持ちを固めて来週から行こうと決心をして、お母さんに「私来週から学校に行こうと思うねん」と打ち明けたそうなんです。お母さんも、少しほっとされますよね。ようやく動き出す力が付いてきたかな、じゃあ一緒に準備をしようと言って、かばんを用意して、教科書を詰めて、制服も準備しました。月曜の朝、その子は用意してあった制服を身に付けて、かばんを持って、二階の自分の部屋を出るんです。階段を下りてきたら、お母さんの背中が見えた。そのお母さんの背中の肩の線が上がっていたという話をしたんです。分かりますか。肩の線が上がるって。いつも、その子は不登校で学校に行っていなかったわけですね。そして、だいたい10時とか11時とか、もうみんなが仕事とか学校に行っちゃった、遅い時間に起きてきます。お母さんは、みんなを送り出して、もしかしたらもう一仕事を終えて、ほっとして新聞でも読んでおられたのかもしれませんが。でも、その子の目には、そのときのお母さんの姿が、肩の線が下がって見えたんです。いつも、私が休んでいるときは、お母さんはしょんぼりしている。肩の線が下がっている。でも、今日は私が学校に行くと言ったので、お母さんは頑張って朝ご飯をつくってくれていたのかもしれないし、お弁当をつくっておられたのかもしれないけれども、その子の目には肩の線がすごくぴんと上がって、お母さんが元気に見えたんでしょうね。それで、お母さんは今日は肩の線が上がっている。その子の心が元気な状態だったら、「お母さん元気そうだ、喜んでくれ

ている。じゃあ、頑張って行こう」と思えたと思うんです。でも、その子は結構いっぱいだったんです。学校に行くと言ったから、行かないといけない。でも、すごく不安で不安で、行けるかな…という状態だったので、お母さんの肩の線を見てどう思ったかというところ、お母さんの肩の線が今日は上がっている。お母さんは、私が学校に行くと言ったら喜んでくれる。お母さんは、学校に行く私のことを愛してくれる。でも、学校に行かない、学校に行けない私のことは愛してくれないのかもしれない…と考えちゃって、その日は学校に行けなかったという報告だったんです。

つまり、自分が学校に行ったら周りは喜んでくれて、そういう私は愛される。でも、学校に行かない私のことは誰も愛してくれない。そういう気持ちになっちゃったということなんです。私はそれを聞いたときに、そんなふうを受け取るんだと思うと同時に、親御さんとしても難しいなというのをすごく実感しました。いつも、肩の線に気を付けましょうということとはできないですもんね。肩の線は、自然に背中に表われる感情ですから、自分では意識できない部分だと思うんです。見えない部分ですよ。だから、そこに気を付けることはできないんだけど、そのエピソードを通して、不登校の子どもさんを抱える親御さんに伝えたいと思うのは、そんなふうを受け取ってしまう子どもが結構いますということなんです。だから、カラ元気でもいいので、学校に行くあなたはもちろん好きだけれども、学校に行けないあなたも大好きなんだよという思いを何かのかたちで伝えることができる、子どもはほっとするかなということなんです。

子どもたちは、行ける私はオーケー、行けない自分は駄目というふうに、周りがそう言っていないなくても、自分自身にそういう足かせを考えてしまうことがありますね。だから、学校に行く、行かないにかかわらず、あなたのことが大好きだよ、愛しているんだよというのを、できたら親御さんからのメッセージとしては伝

えてほしいなということを、よく親の会とかで申し上げます。ただ、それはすごく難しいことだと分かって申し上げています。子どもが行かないとき、親としては行ってほしいです。それが本音です。そういう状態で、行かなくてもいいよとか、行かないあなたも大好きだよというのを本心から言うというのは、いろんなところを越えた後だったら言えるかもしれませんが、簡単なことではないというのは分かっています。分かっているのですが、やっぱり子どもたちからしたら、そういう言葉が欲しいんですね。親から学校に行く、行かないに限らず、あなたのことが大好きだよというね。その言葉ずばりじゃなくてもいいので、何かそういった思い、学校に行く、行かないだけじゃないんだなと。こういう自分も自分なんだな、親には愛してもらえんだなというところが、何かのかたちで伝わると、子どもたちは、ほっとすると思います。学校に行っていない、行けていないというだけで、自分のことも否定してしまいますし、周りの反応も、そこから読み取ってしまう。過剰に周りの反応を、そういうところに引っかけてよんでしまう。そして、さらに自分のことをつらくしてしまうことがあるところをお話しさせてもらいました。

では、どのように対応したらいいのかということですが、まずは親御さんが子どもたちの気持ちをしっかり受け止めてもらって、理解してもらうことが大事だというのは一般論で思うのですが。さっきから申し上げていますように、子どもが学校に行っていないという状況の中で、親御さん自身が冷静に子どものことを理解しようとか、子どもの気持ちをしっかり聞こうというのは、簡単ではないと思うんです。私自身も、いま思春期真っただ中の子どもがいますが、やっぱり子どもの気持ちを親が冷静に聞くというのは簡単ではないと日々実感しています。だから、親御さん自身が全部それをしなくても、代わりにしてくれる人、親だけではなくて、別の人、その役をしてくださってもいいと思うのですが。できるならば親御さんがちょっと腰

を据えて、この子はこの子の人生だなとか、この子の生き方があるよなとか、そういうところで少し腰を据えて、その子の言葉を受け止めてくださることができれば、子どもたちはすごくほっとするし、安心できるかなと思うんです。

私は、年に何回か不登校経験をした高校生たちの話を聞くというシンポジウムに出させていただいています。そこで、自分が不登校だったときに、親にどんなふうに言ってほしかったか、あるいはどんなことを言われるのがつらかったかというのを聞いています。渦中にいるときはなかなかそれが言えないし、理由も説明できないけれども、一山越えたときには、それを言葉にできるようになることが多いんですね。みんな割と冷静に、その当時のことを話してくれるのですが、親御さんにどうしてほしかったかと尋ねて、よく出てくる言葉を書いてみました。「訊かれる」よりも「聴いてほしい」「わかってほしい」。この言偏の「訊く」というのは、尋ねるという意味ですね。「どうして学校に行かないの」とか、「何かあったの」とか、そういうのをあれやこれやと訊かれる、訊き出す、問いただされる。一方、この耳偏の「聴く」は、気持ちを受け止める聞き方ですよ。言葉面ではなく、自分の気持ち、学校に行くのがしんどいねんという。「何でなの」ではなくて、「しんどいんだ」という、そこをしっかりと聴いてほしい、分かってほしい。でも、じゃあその子に「分かってもらうようにしゃべった?」と言ったら、「いや、しゃべらなかつた」と、たいていの子は言います。分かるようにしゃべっていないんですね。だから、親に分かってよと言っても、それだったら分かるようにしゃべってくれたらいいのですが、渦中にいるときは言葉にはできなかつた。でも、分かってほしかったという、それが本音なんだろうと思います。

「そっとしておいてほしかった」というのも、よく聞きます。そっとしておくというのも難しいことですよ。もちろん、「学校はどうするの」とか、「明日どうする」とか、そんなことを言っちゃいけないというものもあると思うんですが、

そっとしておいて。これは、何もしないとは違うんです。何もしないで、本当にほっとくというのとは違うんです。そこがすごく難しく、何もされないと、お母さんはもう僕のことを見捨てたのかなとか、お母さんに自分は無視されている、諦められたのかなと逆に不安になったりすることもあって、何もしないとちょっと違うんです。微妙ですよ。

それから、「いつも通りにしてほしかった」、「普通にいてほしかった」もよく不登校経験のある子が言う言葉です。「いつも通り」が一番難しいですよ。学校に行っていないという状況が、お母さんからしたら普通じゃないんです。そういうときに、「いつも通りと言われても、そんな絶対に分かりません」と言われることが多々あります。ある高校生の女の子が、お母さんに言ってもらってうれしかった言葉として紹介してくれたエピソードなのですが、その子は不登校をして、お家にもっている。寒い冬の日にお母さんが「うどん食べや」と言ってくれた。それがすごくうれしかったと言っていました。どの子に対しても「うどん食べや」がいいんじゃない、たぶんその子は、そのときに何かお母さんのさりげない愛情とかを感じたんです。学校のことでなくて、何か自分のことを、体のことを心配してくれて、温かいおうどんを作ってくれて、「食べや」と言ってくれた。それが、そのときのその子の心にはすごく響いたんだらうなということが分かりました。特別な言葉じゃないんです。何か特別な言葉じゃなくて、むしろ普段通りの言葉。でも、なかなか普段通りじゃないから、普段通りに言えない言葉なんですよ。親の気持ちにも余裕がないと、そういうさりげない言葉は出てこないですよ。どっちもが緊迫して、追い詰められたときというのは、声に緊張感が走りますよね。平気なように見せていても、やっぱりそういう緊張感は伝わっちゃいます。このときの「うどん食べや」には、きっとお母さんの緊張感とか、心配とか、そういうのを越えて、何かお母さんの気持ちが、その子の心にすっと入ってきたんだと思うんで

す。

では、親として子どもの気持ちをどう支えたいのかということなんですが、これも体験談から幾つか聞いてみたのですが、両極端です。例えば一つ目、親御さんに言われてうれしかったこと。「休め」と言ってくれたのがありがたかった。これは、多いです。しんどくて、もうだいたい初期のころは、親御さんも不登校という状態を受け止められなくて、何とかして学校に行かせたいと思われまます。それで、車に積んで学校まで連れて行ったり、脅したり、叱りつけて学校に行かせるということが結構初期のころはあります。でも、どこかで親御さんの中で、そんなことをしてもしょうがないんだな、この子は今行くのがしんどいんだなということが分かったときに、「今日はもう行かなくてもいいよ、そんなにしんどいんだら休んだら」と言ってくれた。それがありがたかったということです。これは、比較的多くの子たちが言います。

一方、少数派かもしれないのですが、自分が休んでいたときに、親御さんが背中を押してくれたから、長期に休まずに済んだ、学校に行く気になったという子もいるんですよ。難しいですよ。休んでもいいよと言った方がいいのか、ちょっと頑張って行こうやと背中を押した方がいいのか。でも、これも二者択一ではないですよ。その子の状況によっても変わると思いますが、昨日はこうだったけど、今日はこうだということかもしれない。あるいは、言い方にもよるかもしれませんね。言葉面だけで書いたときには分からないですが、言っているときの親の言葉に含まれているとげの強さとか、心配した様子とか、そういうものによっても子どもは微妙に親の気持ちを読み取りますので、言葉ではこう言っているけど、本音はこうだらうとか、こんなふうに言いながら、実はこう思っているに違いないみたいな感じで、深読みをすることもあったりして、子どもはその辺を結構敏感に察知します。いろんな要因によって変わりますが、休めと言われてほっとする子もいるし、

ちょっと背中を押してもらって、動き出してよかったという子も両方いるということです。

親御さんが心配する、その親が心配しているのが重かった。自分のことを心配してくれている。親が横で悲しんでくれている。ものすごくつらそうな顔をしている。そのつらそうな親の姿が、もう重くてつらくて仕方がなかったという子が一方でいます。でも一方で、親と一緒に悩んでくれるのがすごくうれしかった。それが、自分の支えになったという子もいるんですね。どっちが正解か分からないですよ。子どもの状況によって、状態によって、あるいは、そのときの親子関係の在り方によって、親御さんの気持ちの状態によっても、その言葉の響き方は変わるんだろうと思います。そう考えると、子どもの言い分はさまざまです。その時々の子どもの気持ちとか、その状態にぴったりの言葉を投げ掛けてあげるのが、もちろんそれが一番いいのですが、実際には難しいと思います。実は、子どもの方も、言ってくれても素直に反応しにくいということもあるんですね。本当はうれしいのに、うれしいそぶりを見せないとか、ちょっと反抗的な感じで、素直に反応できないこともあります。だから、その言葉の投げ掛け方は難しいのですが、一つ言えることは、親子である限り必ずフォローのチャンスはあると思っています。1回言った言葉で、掛けた言葉でそれがまずかったとしても、それで一生親子の縁が切れるということはないです。なので、この言葉がいいか悪いかではなくて、いま考えてこれを言おうと。いまがチャンスだと思って言ってみた。言ってみた言葉がいいか悪いかは、子どもの反応によって、ある程度分かります。学校を休んでいても、先が大変だから、そろそろフリースクールでも探すかとかということが、もしかしたら、ある子は「自分もそう思ってた」と言うかもしれないし、「いやいや、そんなん、今はそれどころじゃない」と思っているかもしれないし。そういう言葉が、もしいい状態だったら、その子にとってプラスの状態だったら、きっとその子はそのときには「あ、

いいね」と言うことはないにしても、後から自分でフリースクールを調べてみたり、何らかの反応をしてくるかもしれないですね。でも、本当にいまそのお題は嫌やねん、いま聞きたいねんということだったら、表情が変わったり、顔が急に曇ったり、そういうことが分かることもあります。だから、何の言葉がいいか悪いかというのは、そんなに絶対的な基準はないのですが、親子だから、いったん掛けた言葉が、そこでもう絶対にこの子との関係を切るというぐらいに決定的なことにはならないし、必ずフォローのチャンスは巡ってきます。だから、これを言っちゃいけないと押さえ込むよりは、その子がどんな反応をするのか、そこをしっかりと見ていただいて、それによって、この言葉はちょっとまだ早かったとか、この言い方は今は駄目なんだとか、そういったものを、その子の反応から読んでいただくというのも一つだと思っています。ある意味難しいし、めんどくさいという感じはあるかもしれませんが、それくらい子どもたちの揺れというか、特に親御さんの言葉には敏感に反応したり、必要以上に過敏に構えてしまうということが、子どもたち側にあると思います。

次に、学校復帰のことも少しお話したいと思っています。子どもたちが引きこもった状態から学校に戻るときというのは、そんなに簡単に、すぐに教室にホイと戻れるわけではなくて、準備状態として別室登校とか、放課後登校などを学校側で取っていただくこともあると思います。でも、やっぱり、教室に入ることはものすごく不安がありますよね。最初から大人数の中に入るのはしんどい。だから、最初はちょっと足慣らしに、教室ではないところで練習する。場合によったら、さっき言いましたように直学校ではなくて、適応指導教室とか、フリースクールとか、どこかの相談室とか、そういうところで1対1の関係とか、小さな集団の中で練習をして、それから学校という手順を踏んでいただく方が案外スムーズにいく。時間がかかる、遠回りのように見えながらも、案外確実に進んでい

けるという子も中にはいます。

それと、もう一つは、やっぱり進路のこと。これも、特に中学校3年生ぐらいになったら重要なテーマになっていくんじゃないかなと思います。どうせ僕なんて行ける学校がないですとか、いま学校に行けていないんだから、高校なんてどうでもいいとか、そんなふうにごく投げやりな感じで言う子もいると思います。でも、私が出会ってきた子たちを全部総合して考えたときに、本心からもう学校なんてどうでもいいですと言える子は、むしろ少ないんじゃないか、心の中では「楽しい学校があるんだったら行きたい」、「自分に合う学校があるんだったら、そこに行きたい」、「自分も周りの子と同じように楽しい高校生生活を送りたい」という方が本音かなと思います。ただ、それが言えないんです。なぜ言えないかという、もし自分が学校に行きたいと言っても、今こんな状態、学校に行けていないから、もしかしたら高校に行っても、行けないかもしれない。あるいは、今学校に行っていないんだから、勉強もできていないし、自分が受けて通る学校なんてないのかもしれない。そういった不安から、もうどうせ僕なんて行ける学校はない。高校は行かなくてもいいと言い切っている子もいます。だから、ある意味、その子の言葉の上だけの、行くとか行かない、高校はどうでもいいとか、そういう言葉を信じ切らないというのも大事だと思っています。

進路については、レジュメに書きましたように、過不足ない情報とは何ぞやと言ったら難しいのですが、その子が欲しいであろう情報をさりげなく伝えるということが、コツだと思っています。進路に関する情報を子どもにさりげなく、押しつけがましくなく伝える。これは、どういうことかという、あるお父さんとお話しているときに、そのお父さんが教えてくださったのですが、うちの息子は中学校3年生で、進路のことが親としては気になっていますと。子どもの方も、たぶん心配しているんだと思いますと。でも、親が「高校はどうするの」とか、「こんな高校があるよ」とか、そんなことを言って

も全然聞かないんですとおっしゃっていたんです。でも、できたら、その子に合った高校が見つかるといいですよねというので、一緒に高校探しをしました。学校のパンフレットをお父さんが自ら先にいろいろ集めて、これを見せたいなど。でも、見ないだろうなお父さんもおっしゃっていました。あるとき、お父さんがうれしそうな顔をして相談室に來られて報告されたのが、あのパンフレットを子どもがいつも使っているパソコンの横に置いといたと。そうしたら、子どもの方が、親がいないときに、それをぱっと見たみたいで、自分でパソコンで、その学校のことを調べていました。パソコンの履歴を見たら分かるので、そこで調べているというのが分かったんですという報告をしてくださったんです。つまり、親が「見いや」と、「これはどうや」と言って、素直に見る子はまずいいです。さっき言ったように、いろんな思いがあるからなんですね。もちろん、親に対する何か思春期特有の反抗期もあるかもしれませんが、そんなものをうれしそうに見たら、どうせおまえには行けないよという声がどこかから聞こえてきそうなので、そういうものを素直に喜んで見たくないという気持ちもある。でも、半面で自分もできたら高校に行きたいなという気持ちがある。どんな高校があるか心配だから、そういう情報を聞きたい。そういうときに、押しつけがましくなく、さりげなくそういう情報があったら、自分の好きなときに見て、自分で探すことができる。だから、それはありがたかったという話です。そういう意味では、子どもたちが自分の気持ちで、そのときのタイミングで見られるような状況で、情報を差し出すことができたら一番いいなと思っています。

ただ、そうは言ってもなかなか不登校の子は動かないです。親が焦っても、なかなか動かない。そういうときに、よく親御さんに申し上げるのは、じゃあ親御さんからまず動くというのもありかなと提案させていただくんです。学校の説明会とか、オープンスクールとかに、親御さんがまず行かれて、情報を聞いてくる。それ

で、子どもにお話しするでもいいし、あるいは見てきたパンフレットを、さりげなく置いておくというのもありかなと。「これはどうや」、「行きや」と、上から言われるのはすごく嫌なんです。受けても駄目かもしれないという不安もいろいろあって、素直には動かないですが、どこかで自分に合う学校があるんだっただと思っただけです。親から動くというのも一つです。でも、最終決定は、やっぱり子どものフィーリングだと思っています。子どもさんが実際に足を運んで、その学校の空気に触れる。その学校の雰囲気を見て、ここだったら行けるかな、ここだったら自分の感じにも合うかな、無理をせずに、背伸びをせずに、ここだったら過ごせるかなという感覚を、子どもさん自らがキャッチするのが大切だと思っています。

不登校経験者が語るシンポジウムで、最終的に高校にめぐり会った子に、「何で学校に行く気になったの」と聞くことがあります。例えば、ある女の子は、中学3年生のときに家でテレビを見ていたら、自分の好きなアイドルがテレビで自分の大学生活の話をしていました。たぶん、嵐の櫻井君だったと思うんですが、大学時代こんなんで楽しかったという話をしていた。それを聞いたときに、その子は櫻井君も大学時代はよかったんだな、私も大学に行きたいな、大学に行くんだったら高校に行かなあかんよな、高校に行くんだったら今こんなことをしていたら…、というふうになって、そこで何かスイッチが入りましたという子がいました。じゃあ櫻井君をいつも見せたらいいかと、どの子にもそれが効くわけじゃないんですよ。たぶん、その女の子は、そのときまでに自分もどうしよう、これから先どうしようというのを紆余曲折しながら悩んでいる状態があって、そんな時にそういう情報が入ってきた。それで、このままじゃいけない、いま動かないと駄目だな、自分が動かないと変わらないよなというのが分かってスイッチが入ったということなんですね。だから、いつも誰でもそれを見たらスイッチが入るというものではありません。本当にしんどい状況を

過ごしたときに、どんどん底に落ちて行って、底に足が着いて、ふっと上がるときの、あの瞬間の感じですかね。もう苦しい苦しい、これ以上行ったらおぼれると。でも、そこで底に足が着いて、ふっと上がっていくという、そういうタイミングを経験する子がいます。なかなか難しいですけどもね。何がチャンスになるか、何がきっかけになるかは、はっきり決まっていなくて分からない。でも、種まきは要ると思っています。何も種をまいていなかったらヒットしないですからね。駄目元でもいいので、そういう情報を子どもたちに投げておく。しかも、強制ではなくて、その子が見たいときに、さりげなく見えるようなかたちで情報を投げておく、投げ続ける、駄目元で種を植え続けるということが、周りの人には必要になってくるのかなと思ったりします。最終的にその子どもが自分の目で見て、この学校だったらと思えるいい学校に出会えるのが一番です。その子なりに、ここだったらとか、自分でも大丈夫、私はここに行けるなという決め手になるようなものと出会えれば、子どもたちは動き出せると思っています。

ただ、高校に行けたら子どもたちはもうそれで万歳なのかというと、決してそうではないというのを、不登校のシンポジウムで出会った高校3年生の男の子のエピソードからご紹介したいと思います。その子は、中学校はずっと不登校でした。オープンキャンパスに行った高校に不登校の子が結構いて、先輩の話を聞いて、自分もこんな高校生活をしたいと思ってその学校に行き出しました。高校に入ってから1日も休まず、2年生の後半から生徒会にも入り、高3で生徒会長になったという子でした。それだけを聞いたら、中学校に1日も行っていなくても、自分でこの学校と思ったら毎日朝から休まずに来られるというのもすごいし、高校に来てから生徒会もやって、生徒会長もしているって、ものすごい希望の星だなという感じで、私も、シンポジウムに参加していた親御さん達も、その子の話に聞きいていたんです。その子は、自分が今頑張っている話をしてくれた後に、「で

も、自分の気持ちはまだ、まだらです」と言っただけです。最初、まだらってどういうことか分からなかったの、「まだらってどういう意味？」と聞いたら、「まだ自分の気持ちの中には、あの行けなかったときの自分に、いつ戻るか分からないという不安はあります」と言っただけです。それを聞いて、ちょっと私はびっくりしました。もう学校に来出してから2年以上たっています。それで、1日も休んでいない、生徒会長もしていますというところだけを聞いたら、もうエリートのような、もう優等生そのもので、頑張っているお手本のような男の子なのです。でも、心の中は真っ白じゃない。真っ黒な状態は脱した。でも、いつまた黒に戻るか分からないという、まだらなんですということです。その言葉を聞いたときに、私は自分のスクールカウンセラーとしてのやり方も、少し反省しないといけないと思いました。

不登校の子が学級に復帰して、学校に通えるようになりますよね。すると、スクールカウンセラーとしたら、最初は、1週間ぐらい教室の後ろの方から大丈夫かな、今日は来ているかな、友だちはできたかなとか、先生にも尋ねながら様子を見ます。1カ月ぐらいたったら、もうそろそろいけるだろうというので、私なんかは、すうっとなるべく引くようにしていました。というのは、あまりカウンセラーがちょろちょろするのもよくないですね。その子にとったら、もう忘れたい過去かもしれない。不登校であることは、もう消したい過去かもしれない。だから、あまりカウンセラーが横からちょろちょろして、「大丈夫」と聞くのはよくない。これは、もちろんそうなのですが、2年以上たっても、まだまだらやとしたら、1カ月ぐらいでは、まだまだまだらですね。そういうときに、周りがいろいろ気にして、「大丈夫か」とか、「無理しなや」と優しい声を掛けてくれる間は、まだ支えられるんですが、周りが安心して、一度に引いてしまったら、もしかして心細くなっていたんじゃないかなと。私の方は、気遣いもあって引いたけど、この子にしたら、みんなが

一遍に引いたら、やっぱり心細くなったり、大丈夫かなと不安になったりすることもあったかもしれないというのを考えさせられた言葉でした。だからと言って、いつまでも「大丈夫か」と、「無理しなや」と、そばで言い続け過ぎるのもよくないでしょうね。だいたいしばらくの間は、そのしばらくというのは、その子によっても長さは変わると思うんですが、来始めて周りが安心して、でも、その子にしたら、みんなが引いてしまって自分が一人になって大丈夫かなと不安にならない程度にはフォローが必要なのだというところを、そのまだらの言葉から学ばせてもらいました。

あと、高校がゴールではないですよ。不登校のゴールは、文科省は「社会的自立」という言葉で語っています。社会で一人の人間として生きていく。それは、不登校である、ないに限らずですが、子どもたちの教育の最初のゴールとして社会的な自立というのを挙げる人が多いです。なので、高校に入ることがゴールではないんですが、現在、不登校経験者の高校進学率は、ものすごく上がってきています。不登校じゃない子は、もう100%に近い子たちが、高校に進学するようになっていきます。不登校の子も、一時は行ける高校は定時制だとか、そういう学校に限るみたいな時代もありましたが、今は、高校のタイプが多様化して、いろんな選択肢が目の前に展開されるようになってきました。だから、高校の進学率も、不登校をしていない子に比べたら若干落ちますが、上がってきています。かつ、中退率は、その半面で下がってきています。だから、不登校の子が高校につながって、高校を卒業する率は、かなり上がっています。もう少し詳しく言いますと、中退は減ったのですが、中退の陰に隠れている転学はあるんです。この学校を辞めて、ほかの学校に行く。その子たちは中退にならないんです。そう考えて見たときに、高校生の不登校経験者の中には、いったん進んだ学校を辞めて、他の学校に進学する子も実は結構います。私は、高校に入ってから進路の選び直しもありかなと思っていま

す。全日制はしんどい。でも、途中でそこから中退するのではなくて、じゃあ昼間も行ける定時制に行こうかとか、あるいは全日に近いかたちでやっている通信制もあるから、そこに籍を置こうかとか、いやいや、毎日通うのがしんどかったら、本当に通信制のかたちでサポートを受けながら高校卒業を狙おうかとか、場合によったら高卒認定という試験もありますから、多少サポート校とかでレポートのサポートをしてもらいながら高卒認定試験を受けて、高卒の資格を取っていくというのがありますね。そう考えたら、高校がゴールではないし、いろいろ多様化した新しいタイプの高校が増えている。そういう選び直しが、すごくしやすくなっている時代でもあるというのを感じています。高校進学はすごく重要だし、大事なことだし、難しいことなんだけれども、そこで最終決定というわけじゃないから、入ってからの選び直しとか、高校はスキップして、高卒認定で大学に行くという方法もありだと思っています。そう考えたら、いろんなパターンがあると思いますので、そういう意味では進路選択や進路指導は大事だけれども、これがもう最後だとか、あまり思い詰めて考える必要もないかなと感じています。

(第2部)

前半は、子どもたちとか親御さんとかのこと、それから進路のことのお話をしてきたのですが、後半はデータを紹介しながら話をしたいと思っています。

ここに紹介させてもらったデータですが、ずいぶん前になりますが、文科省が2003年に出したデータです。まずどうしてこの調査をし、それを私が担当することになったかという経緯を簡単に申し上げます。文科省が2002年の9月から半年間で15回、「不登校問題に関する調査研究協力者会議」という、不登校の全体像を把握し、国としての施策を考えるという会議をもちました。私もそのとき委員の末端に入れていただきました。施策を打つためには当事者、子どもや親の気持ちがどうなのか、そこを明らかに

しないといけないという意見があって、調査することになりました。不登校の子どもたちの追跡調査というのは、平成5年度に中3だった子ども、それから平成18年度に中3で不登校していた子ども全員に調査をするというのを国はやっていましたが、親御さんの調査というのがあまりなかった。そこで、私にその役が回ってきました。全国、不登校の子どもを抱える4千人の親御さんにアンケート調査をさせていただくという、すごくリスクの高い調査でしたが、各学校とか、それからスクールカウンセラーの方の協力も得て、4千人に調査をした結果、3416人の方から回答が得られました。回答率85%です。これは、国のいろいろな調査結果から見ても、極めて高い回収率であると思います。私のところにアンケートが全部返ってきて、データ処理をしました。やはりいろんな意見がありました。それだけでも親の気持ちのさまざまが分かるなあと思うのです。

例えば、「自分の子どもが不登校で、すごい心配で大変なときに、こんなアンケートに答えることは辛すぎる」というのを書いてこられている方もいて。「そらそうだ」とは思うんですね。実際不登校のことについて、いろいろな項目で聞きましたから、親としたら大変だろうなど、本当に申し訳ないという気持ちもありました。一方では便箋を13枚ぐらい追加して「自分の子ども、今こういう状態なんです」というのを切々と書いてこられた方もありました。また一方では「確かにこういう調査は答えるのは辛い。でも、あえて頑張って書きます。その代わりに自分の思いを国に伝えてください」という、そういう返答もあって。責任重大だなと感じながら3416通を開封しました。

ちょっとこの中身から脱線しますが、その意見の中に、こんな意見があったんですね。そのアンケートの表題が「不登校問題に関する調査研究協力者会議からのアンケートのお願い」という表題が付いていたんですけど、この「不登校問題」という言葉に対してすごく抵抗を示され、意見を書かれた方が何人もおられたんで

す。実はいま思うと、私はそれに対して全く意識がなくて。「不登校問題」とか「学力問題」、「いじめ問題」、「格差問題」。いろんな教育問題の一つとして不登校のことを考えていましたから、「不登校問題」という言葉に対して、違和感なく委員になりました。ただ親御さん、当事者の方がどう書かれたかというところ、「不登校問題というように、自分の子のことを“問題”って言われることに、すごく寂しい、辛い思いを感じます」ということなんですね。そう言われたら、もっともなんです。自分の子どもが不登校していて「不登校問題」、「いかにして不登校をなくすか」、「不登校をゼロに」と言われたら「何か自分の子が悪いことをしているように思えてしまうし、いじめ・不登校と並べて語られたら、なんかうちの子が悪いんだ、うちの子が学校にはいけないんだと感じてしまいます」という意見だったんですね。私はそれを初めて読んだときに、「あっ、そうやな」と本当に正直そのときに初めて、その言葉のインパクト、当事者さんにとってのインパクトを実感したんですね。それが1通ではなくて、数は数えていないのですが、かなりの数の意見があったんです。そうした意見を国の委員会でフィードバックしました。親御さんの中に「不登校問題」というくり方、この言葉自体にすごく辛さを感じている人がいる、国は別に“不登校の子が悪い”というスタンスで書いているわけではないけれども、そこの誤解がないように報告書にはきちんと説明がいると思いますという意見を言ったんですね。最終的には国の報告書の中に、「不登校問題というのは、不登校の子ども自体を否定するのではなくて、不登校になってしまう状況そのものを教育の問題と考えて、そこを改善していこうというのが、この会議の意図である」というのを付け加えていただいたんですね。意見を書いてくださった親御さんには一つのフィードバックになったかな、少しは国に伝わったかなと思いました。この会議があって十年かたって、その会議の第2弾がありました。

私もまた委員の末端に入ったので、よくよく

その依頼を見てみると、そこには「不登校に関する調査研究協力者会議」という名前になっていたんですね。国は「不登校問題」という言い方をやめて、「不登校に関する…」というふうに変えてくださったんですね。それと同時に、つい最近報告が出ましたけれども「教育の機会確保法」という、不登校をしている子どもたちも多様な教育の機会をしっかりと確保するように国として努めていこうという法律が出されたんです。そこでは、フリースクールなど学校以外で勉強している子たちの教育を受ける権利とか、いろんな教育のタイプを国として進めていこうという方針が出されました。その報告書の中にも、「不登校のことを問題と考えない。不登校の子ども自体、不登校ということの問題として考えることはしない」と、はっきりとした文言が入っていました。ある意味、最初の保護者調査で寄せてくださった親御さんの言葉が、こういうかたちで国に返っていくんだな、国を動かすんだなということが、すごく実感された出来事でもありました。言った親御さんはたぶんそんなに数は多くなかった。それでも十何人はいらっしゃったと思うんですね。その方々の思いが国に伝わって、不登校のことを、不登校は教育問題で、その子たちが悪いんだという印象は間違っている。そういう捉え方を変えていこうという国の姿勢を実感できることが何度かあったということ、伝えさせていただきました。

では、その親御さんの調査から分かることなんですが、表の1をご覧くださいませるか。これは、自分の子どもが不登校されている保護者の方に、「学校に対してどんな不満がありますか?」「学校のことをどう評価しますか?」ということをお願いしたものです。全部はちょっと持ってきていませんので、不満と評価に関して代表的な回答をそこに示してみました。

まず、不満の方です。「親御さんから見て、性急に登校を求められるのが辛い」、つまり「学校どうするの」とか「早くおいで」とか「せかされるのが辛い」という項目に対して。私は結

構親御さんに、そういう人が多いのではないかなあと思っていました。そうしたら、回答を見ると348人。回答してくださった方の中の約1割、10人に1人の方が、これに丸を付けておられました。10人に1人の方が学校から「登校どうする」とか「早くおいで」とか、そういう登校刺激が辛いと感じておられるということです。もう一つなんですが、「家庭訪問とか連絡も少なく、見捨てられたように思う」、つまり学校から連絡がないことが不満だという親御さん。これはどれくらいかなと思っ、ふたを開けましたら、こちらの方がかなり多くて25%です。つまり、4分の1の人がここに丸を付けられたんですね。ということは、登校刺激が嫌、登校刺激を避けたい親御さん以上に連絡がないのも困る。これ両方とも親の本音ではないかなと思っんです。自分の子どもが不登校しているときに、あんまり学校、学校と言われるのも嫌だし、でも、全然連絡がないのは、それもまた困る。「うちの子、忘れられているのではないかな」とか。「もうテストが近いのにテストの範囲も教えてくれない。受けられるかどうか分からないけれど、せめて範囲ぐらいは教えてくれてもいいのではないかな」とか。いろいろ親御さんとしての思いはあると思っんです。そういうところで、あまり刺激をされても困るし、でも、忘れられたらもっと困るという、親御さんの揺れというのが一つ見えてきました。

評価の方に目を転じると、「教師が相談に乗ってくれた」、これがなんと5割です。今日ここに学校の先生方もずいぶん来てくださっているんじゃないかなと思っんですけれど、不登校の親御さんの話を担任の先生が、あるいは担任ではなくても学校の先生が聞いてくださって、それが良かったと思っっている親御さんが半数です。では、スクールカウンセラーはどうだったのかという、スクールカウンセラーも実は項目に入っていたんですけれど、3割を切っていましたね。というのは、この調査をした2002年当時、スクールカウンセラーは、いまよりは配置数が少なかったということもあるのですが、そ

れでもやはり先生に比べたら、スクールカウンセラーは常時いるわけではなく、お母さんからしたら、やはり学校の先生の方が近い。なので、学校の先生が子どものことを、あるいは親御さんの気持ちを聞いてくださるというのは、ずいぶん不登校の親御さんにとっては、ありがたいことです。一方で、相談活動に関わっていると「学校の先生にこんな言われたんです」とか「学校はこんなことをするんです」とか、逆に「してくれないんです」とかね、そういうことで、学校の先生への不満を持っている方ももちろんいるんです。だから、これが全てというわけではないのですが、それでも50%、半分の人が、先生が話を聞いてくれることを評価されている。それから、もう一つ。「別室登校などの措置を取ってくれた」。これも案外高かったんですね。先程も申しましたが、休んでいた子が即、教室に復帰するというのは難しい。その前段階として、別室でまずは小さいところで練習してから教室にという段階が、ずいぶんと有効だというケースもありますので、それを学校がしてくれたということが評価されています。昔、私がスクールカウンセラーをしていた学校でも、別室登校を考えてくださった先生がいらっしゃいました。私が話を聞いていた中2の女の子ですが、その子が学校になかなか来られなかったのを、「じゃあ、別室をつくらう」と。それまでその学校はなかったのですが、別室をつくって、その子が来やすいようにしようと学校が考えてくださったんです。私は、それはありがたいなと思っました。この子は、教室はまだ難しい。でも来られる雰囲気にはなってきたから、別室があったらありがたいなと思って様子を見守っていたんですね。そうしたら、学校はどうしてくださったかという、その子が来るための別室を、午前中に設定しようと。ちょっと午前中というのがまずかったんですね。不登校の子にとったら、朝は起きにくいとか来にくいというのもあって、朝よりは午後の方がよかったかなと思っんですけれど、そこはちょっと学校の都合もあって午前中に設定してくださ

いました。かつ、月曜日から金曜日まで時間割ごとに担当を決めてくださったんですね。月曜日の1時間目はA先生、B先生は次で、養護教諭は次で。スクールカウンセラーが来る日は、この2時間はスクールカウンセラーでと全部きっちり決めてくださいました。これはすごい体制を組んでくださったなと思った半面で、ちょっと大丈夫かなという不安もありました。本人に先生方から「こんなふうにして学校は迎える準備があるから、頑張っておいで」と言ってくださって。私も頑張ってきてほしいなと思っていたんですが、結果的には全然来られなかったんです。ある意味、学校の頑張りが裏目に出てしまったんです。まずかったのは、一つは午前中というのがちょっとつらかったかなというのが1点あるのですが、それ以上に、かっちり決め過ぎたかなという。別室というのは、なんか来たいときに来られて、かっちりしない中で漂えるような空間が、まずはほしいという子が多いんですね。そこに先生が必ず付いてくださって、1対1で横できちんと見てくれるというのは、ありがたいような、ちょっと辛いようなということだったのかもしれないですね。そういう意味で、その作戦はちょっとうまくいかなかったんです。別室登校とか放課後登校とか考えるときにも、学校の熱意だけではうまくいけません。この子にとってどういう体制がいいのかな、この子は何を望んでいるのかなと、うまく探りながら、最初はほんやりした枠の方が入りやすいのかもしれないですね。だんだんその枠を固めていって、最終的にはちょっとかっちりとなってきたところで教室に戻れるかなという感じもあるのですが、最初はほんやりと、なんか漂えるような空間があるという方が来やすいのかなと、そのケースから感じました。

ここで、またエピソードを幾つか紹介しようかと思います。不登校の子どもたちに対応するときに、子どもに直接会うのは簡単ではないです。学校に来てくれないので。でも、少なくとも親御さんを支える意味は大きいかなと思って

います。というのは、前半でも申し上げましたように、親御さんはすごく困っておられます。心配です。なんとかして学校に行ってほしいなと思われれます。それがちょっと行き過ぎてしまって、かえって子どもとの関係をこじらせてしまったりとか、親がいっぱいいっぱいになって破裂してしまって、その余波が子どもに来てしまうということもあります。まずは親御さんがどこかでほっとする時間とか、ガス抜きをする時間とか、ちょっと気持ちをリフレッシュして、子どもと出会い直しができるような、そういう気持ちの切り替えが大事だなと思っていますので、カウンセラーが親御さんに会うことは、すごく意味があると思っています。

それを実感させてくれたエピソードをご紹介します。中学2年生の男の子。小学校のときから不登校が続いていて、中学校も1日目は行ったのですが、2日目から不登校になったというお子さんでした。学校は、やはりちょっといづらいということがあって、途中で隣の学校に転校されました。その隣の学校にスクールカウンセラーとしていたのが私で、そこでその子と私が出会いました。転校したからといってすぐ来られるというわけではないけれども、環境を変えたらなんとかなるかなと親御さんも必死だったんです。1日目は頑張ってきて来ました。やはり2日目から来られなかったんですね。親御さんとしたら、考えて決心してやったけれども来られなかったというので、ちょっと落ち込まれたんですが、すぐに気持ちを切り替えて、私のところに相談に来られました。その後、だいたい週に1回ぐらいのペースで、親御さんが相談に来ることが始まったんですね。その親御さん、ちょっと体にもご不自由があったのですが、毎週頑張って、決まった時間、決まった曜日にお約束をして来られ3カ月くらいたちました。親御さんともそこそこの関係ができて、いろいろお話ができていたころのことです。その子も不登校歴が長かったし、その子自身も、「このままではいけない」と思ったと思うんですね。もう2学期が始まって、これから頑張っ

て学校に行こうと、たぶん本人なりに思ったと思うんです。あるとき、「来週から学校に行こう」と決心をして、「僕、来週から頑張っていくわ」と親御さんに言いました。やはり親御さんは、それにちょっとほっとされて、月曜日の朝、大丈夫かなと思いつつも、行ってくれるというので期待して、月曜の朝を迎えられたんです。月曜の朝になってもその子が起きてこない。「早く起きないと学校に間に合わない」とお母さんは思って、部屋に起こしに行かれたんです。起こしに行ったら、その子が布団を頭からひっかぶって泣いている。お母さんにしたら、「せっかく期待したのに」というのもあったと思うんですが、その子には、ぐっとこらえて何も言わず、その場をやり過ごしたんです。ちょうど幸いその日がスクールカウンセラーとの面接日だったので、学校に來られました。よく覚えているのですが、相談室に来るなり、扉も閉めず「先生」って話し出されて。「ちょっとまずはおかけください」と言ったのを覚えています。落ち着いて座っていただいて、話をされたのを聞いたなら、「先生、私、あの子に裏切られたんです」というのが第一声だったんですね。すごい剣幕だったので、私もちょっとびっくりして、「どうしたんですか」と聞いたら、今話したような経緯をお母さんが語られました。「今日から学校に行くって言って、私もすごく期待して、頑張って準備して、ここまで来たのに、あの子には裏切られました」という、そういう話だったんですね。そういうことだったのかと。お母さんの気持ちも分かるけれど、子どもも辛い。布団をかぶって泣いているわけですから。子どもにしても、お母さんに「行く」って言ったのに、行けない自分がすごく辛かったと思うので、子どもの気持ちも分かるなと思いつつも、言葉を挟みずに聞いていました。お母さんはだいたい20分ぐらい怒りをぶちまけておられたのですが、吐き出したらトーンダウンしてこられて、怒りのトゲトゲがちょっと緩まってきました。私は何も言っていないんですけど、お母さん自らその子どもの言い訳を始めました。「本当に行

く気だったんですよ。かばんを出して、教科書もそろえて本当に行く気だったんです」とお母さんが言われ始めて。「そうですか」って、またひたすら聞いていました。最後には、お母さんは最初の怒りの顔がちょっと緩んで、ちょっとだけ笑顔を取り戻し、「また一からですけど頑張ります」と言って帰って行かれたんですね。その後ろ姿が、辛いなど。でも、このお母さんに、しっかり子どもさんのことを支えてほしいし、今日家に帰られたら、あの怒りの表情ではなく、ちょっとにっこりした顔で子どもに向き合ってくれるかなと、少しホッとしましたね。それと同時に、あのお母さんがここで吐き出さず、良かったという思いがありました。もし、今日が面接ではなくて、あのお母さんが泣いている子に対して「あなたに裏切られたわ」と言ったら、きっと子どもは辛いですよ。お母さんを裏切るつもりは一切ないと思うんですね。でもお母さんからそう言われて、お母さんの辛い思いを、怒りを投げてこられたら、子どもにしたらすごく悲しい。子どもが落ち込む、落ち込んだところを見てお母さんが「言わなきゃよかった」ときつと後悔されると思うんですね。だから、そういう悪循環に陥るのを、どうにかここで吐き出してもらえたことで防げたかなというのは、私としてはすごくありがたかったなと思いますね。

今のは1例ですけど、今のケースからも分かりますように、親御さんの面接をしても、それですぐに子どもが動くとか来るとことはまずないです。そんなに簡単ではないです。でも、お母さんが、あるいはお父さんが安心できる場所で自分の怒りとか、子どもには言えない、ぶつけられないような、そういうマイナスの感情を、どこかで吐き出していただければ、子どもにそれが直接向かうことはないですよ。どこかでリフレッシュをして、ちょっと笑顔になって子どもに向き合ってくれたならば、またいい循環につながるかもしれない。そう考えたら、やはり親御さんがどこかでホッとされる時間とか、肩の力をちょっと抜いていただけるよ

うな時間というのは、ものすごく大事ななと思っています。

もう一つ、エピソードをご紹介します。これは、不登校の経験のある子どもたちが、自分の経験を語ってくれるシンポジウムでの話です。一連のお話が終わった後に、会場におられた保護者の方が質問されました。「自分の子どもが今、不登校です。私も今すごく辛いので、どこかに相談に行きたいと思っています。どこに行ったらいいですか?」というお尋ねでした。私はそれを聞いたときに、すぐに、「それはやはりお母さんから動かれるのがいいと思いますよ」と言おうと思ったんですけど。隣に4人の高校生がそのとき座っていたんですが、その高校生の一人が「はい」と手を挙げたんですね。あれ、何をしてくれるのかなと思ったら、「僕は自分が不登校だったときに、親には相談に行っておほしくなかった」と言ったんですね。ありゃまあと思って、「どうして」と聞いたら、一つは、「自分の知らないところで、自分の親が自分のことを誰かに話をするというのは、それは自分的にはちょっとあまり気持ちよくないから、それはおほしくなかった」。もう一つは、「自分のせいで親が相談に行くとか、辛い目、苦勞を掛けるのは嫌だったから、だから親には相談に行っておほしくなかった」という言い方をしたんですね。子どもにしたらそうでしょうね。親が一生懸命、髪を振り乱して頑張っておカウンセリングに行ったり、いろいろ病院に行ったりしているのを見ていたら、子どもにはちょっと辛いかもしれないですね。でも、この親御さんに、子どもが言っているように「相談に行かないで」と言いたくないなと思って、瞬間的に悩みました。その親御さんに返したのは、「今子どもたちは、ああいう意見を出してくれました。それは分かります。でも、お母さんには、子どものためにお母さんが相談に行くのではなくて、お母さんご自身のために、どこかに安心して相談できる場所とか、あるいは話せる人を見つけていただくのはいいんじゃないでしょうか」と。「お母さんご自身がスツとしていただくために、

あるいは肩の力を抜いてもらうために、そういう相談の場所を見つけるのはいいと思います」と言ったんですね。そしたらまた反論するかなと思ったけれども、4人の生徒らは、一応黙認という感じでした。自分のためには辛いんです。自分のせいで、自分が休んでいることで親に苦勞を掛けるのは嫌なんですね。それは見たくない。それは申し訳ない。でも、お母さんが自身のためにやっているんだったら、それはオーケーという感じ。それは見過ごしますという感じだと思っています。だから、相談に行かれる親御さんの方も「あんたのせいで」とか「あんたのために私はこんなに苦勞している」というオーラを出し過ぎない。時には出るかもしれないんですけども、それが出過ぎると、やはり子どもにしたら、自分のせいでお母さんに苦勞を掛けておいたりとか、お母さんの白髪が増えておいたりとか、そんなふうになってしまうんですね。だから、そこは「お母さんのために行っているんだよ」、「お母さんが行ってすっきりしているのよ」って、「お母さんが楽しい気分になったらそれはいいでしょう」ぐらいの、そういう気持ちで子どもに見せてもらえるといいかなと思うんですね。

私の大学の相談センターでも、最初は子どもは来ません。最初は来ないんですけども、お母さんが相談に来られて、お母さんがちょっと明るくなってこられたり、あるいは笑顔になってこられたりすると、それを見た子どもが「そこに行ったら楽しいかな」とか「よさそうだな」と思って付いて来るということが、まれですけども、あつたりします。だから、親御さん自身も相談に行かれるときに、「この子のせいで私は苦勞している」ではなくて、「私がまずは楽になりたいから」、「私のために、私のことでどこかに相談に行こう」ということだったら全然正解かなと思いますし、それは子どもにとっても、決してマイナスにはならないと思っています。いずれにしても、親御さんが一人で抱え込まないということがすごく大事ななと思っています。相談の中でよく、「子どもが不登校

ですごく大変な状態だから、これまで働いていたのですが、子どものために家にいたいから仕事を辞める方がいいですか」という質問があります。それは、そんなに簡単には答えは出ないんですが、私は辞める必要ないかなと思っています。本当にね、子どもがいつもお母さんにそばにいてほしいとか、あるいはお母さんがいることがすごく大事で、それがプラスになるというのだったら、それは考えてもらってもいいんですけど。親御さんの方が子どものために自分がそばにいてやりたい。「こんなに子どもが苦しんでいるのに、自分が笑顔になってはいけない」とか、「自分だけおいしいもの食べてはいけない」とか、そんなふうに考えて自分を追い込んでしまう親御さんがたまにいらっしゃるんですけど、それは必要ないかな、むしろ要らないかなと思っています。親がそこまでストイックに自分を追い込んでしまったら、そばにいる子は、余計辛いんですね。自分のせいでお母さん、お父さんにこんな苦勞を掛けてしまっていると、余計罪悪感を持ったりすることもあるので、だからむしろ自分の人生を楽しめとは言いませんけれど、そこまでね、なかなか割り切れないとは思うんですけども、全て子ども中心にとか、子どものために親の人生も犠牲にするというふうには考えない方がいいですね。親御さんの人生も大事にさせていただいて、それが子どもの方にもプラスに返ってくるって考えていただく方が、もしかしたらいいかなと感じています。

ここでデータを紹介しようと思います。このデータに入る前に、ここに至った経緯を少しお話ししたいと思います。私はスクールカウンセラーとかセンターでケースを受けるときに、中学校の義務教育段階の不登校の子に出会うことが多いです。その子たちの訴えから、先ほど言いましたように「どうせ自分は」とか「私なんか」というので、すごく自己否定してしまっている。自己嫌悪に陥ってしまっている。不登校である自分を認められないという状態の子がすごく多いと実感しています。その子たちが、

将来どうなるのかなとすごく気になっていました。自己否定の極地に行っちゃった子が、その後ずっと自分を否定する人生を歩むとすれば、それはすごく辛いことですよ。どこかで気持ちを切り替えて考え直しをし、自分を受け入れてくれるということがあれば楽になるんだけど、ありがたいのだけれど、どうなのかなとすごく気になっていたんですね。幸い調査をさせていただける機会があったので、今日お見せするようなデータが手に入りました。対象は、不登校経験を持つ子たちが、わりとたくさん通う広域通信制高校で調査をお願いすることができました。

その学校には、不登校経験者の子が約4分の3、7割以上の子が不登校経験者です。でも、案外途中で辞めたり、休んだりという子は多くなくて。この学校自体がすごくサポーター的な学校なので、案外そのまま卒業するという子が多いんです。4月から5月にかけて、2400人ぐらいの生徒に調査をさせていただいたのですが、自尊感情の尺度を答えてもらいました。自尊感情というのは心理学の専門用語です。「自分が好きだ」とか、「自分のことをかけがえがない存在だと思います」とか、「自分に満足しています」とかね。私のことをオーケーと感じる気持ちが自尊感情ですね。そう考えたら不登校状態のときの自尊感情は、たぶん低かったと思います。その子たちが高校に上がったときにどうなるのか、やはり不登校を経験していない子と比べて、不登校経験者の方が低いかなと思って調査をしてみたら、ほとんど差がありませんでした。有意な差は得られなかったんですね。つまり、過去に不登校であろうが、なかろうが、4月になって高校に出合えて、その学校に通っている段階で調査をすると、自尊感情に差がなかった。これは1点、私としてはうれしかった結果です。不登校経験した子も高校に行って自分の居場所につながったら、自尊感情は上がる。もしかしたら、低かったかもしれない子が、ほとんど変わらない状態になるんだなと思いました。もしかしたら、今聞いていらっしやる皆さ

んの中に、この学校全体に低いのではないですかという意見もあるかもしれません。通信制高校で、ちょっと特殊な高校であるので、私もそれは気になりました。実はこの同じ自尊感情の研究は、東京都でも奈良県でも、1万人近い高校生に調査をしていますので、その子たちの平均と比べてみました。結果、ほとんど差はありませんでした。だから不登校経験があるうが、なかろうが、高校に上がったその段階では、自尊感情の得点に差がないというのは一つ言えたかなと思います。

ここから一つの結論としてちょっと飛躍的な考察になりますが、一つ私が言いたいことは、「不登校という過去の経験が、今の高校生活を決めるわけではない。不登校のあるなしがその後の高校になってからの自尊感情を決めるわけではない」ということです。これはちょっとホッとした結果です。自分が高校に送り出した、あの子たちが学校に入って友だちつくって、新しい環境になじめたら、もしかしたら傷ついた自尊感情を回復している子が多いのではないかなというのが1点です。

次のデータです。今度は、不登校経験者を群分けしました。どうやって分けたかという、その子たちに「自分の不登校していたことをどう思いますか」と聞きました。「プラスとみますか。どちらかといえばプラスですか。いやマイナスですか。いや、大いにマイナスですか」と、四つに選択肢をつくって聞きましたら、わりときれいに分かれました。実は、文科省でも同じような「プラス、マイナス、どちらでもない」と、文科省は三択でやっているんですけど、そこでも、だいたい3等分されるんです。プラスと思っている子もいれば、マイナスと思っている子もいれば、決めがたいなあという子もいる。今回は四択にしましたけれども、不登校のことをまだちょっと引きずっている子もいるし、それをプラスだったと思えている子もいるというのが一つ分かりました。

さらに、不登校評価によるタイプ別自尊感情を見ると、この四つの群の間にはっきりした差

が出てきました。不登校のことを「プラスだった」と思っている人は、現在の自尊感情が高い。「どちらかというプラスだった」と比較的肯定している子たちは次に高い。「どちらかというマイナス」「マイナスだった」と言っている2群の子は低いということが分かりました。つまり、現在の自尊感情の高さと過去の不登校をどう捉えるかということが、関係があるということが見えてきました。

もう少し切り口変えてその辺を見たかったので、不登校評価による高校生活満足度も調べました。同じ対象の子たちに、「望み通りの学校に出会えましたか」、「学校生活を通して自信ができましたか」という質問をし、「はい」もしくは「いいえ」で答えてもらいました。つまり、不登校をしていて、高校に来て、その新しい高校で、それが望み通りだったかどうか。そこに満足して、自信があるかどうかという調査ですね。結果、「望み通りの学校に出会えた」に「はい」と答えた子の方が、過去の不登校の経験をプラスと答える子の比率が高くて、一方マイナスと答える比率の子が低い。同じように、「学校生活を通して自信ができましたか」に対し「はい」と答えている子の方が、不登校の経験をプラスだったと答える子が多くて、マイナスと答える子が少ないということが分かりました。

一つ目の結果から申しましたように、不登校だったという過去が、今の自尊感情、今の満足感を全て決めるわけではない。むしろ現在の生活に対する満足感とか捉え方によって、過去の見方が変わるかもしれない。その因果関係は、このデータからは言えないのですが、今の満足感と過去の捉え方が、かなり関係してくるということが、この結果から分かりました。ただ、そんなデータで言わなくても、たぶん皆さんの感覚としては分かっていたかと思うのです。例えば自分の生きてきた道を考えても、今がすごくハッピーとか、今自分はすごくやっています、満足していますという場合は、「過去も苦勞したけど、あの苦勞がいまに生きてるよな」と思えるだろうし、逆に、今が不本意で、こん

なはずではなかったという、辛い思いを持っているなら、「やっぱりあの過去の失敗が引いているな」と人間は考えがちなところがありますので、もしかしたらそういうメカニズムも働いているかもしれません。

私がこのデータから申し上げたいのは、過去が今を決めるのではなく、今の在り方が過去の見方を変えるということです。過去は変えられないですよ。不登校という過去は変えられない。でも、不登校のことをどう意味付けるかというのは、人それぞれで変わり得ますよね。私が面接した子たちとか、不登校を経験した高校生たちの話を聞いていても、そうやって自分の経験を客観視して人前でしゃべれるくらい消化できている子たちは、自分の不登校の経験を語るとき、わりとプラスに意味付けて語ってくれる子が多いんです。例えば「自分は不登校をして、あのときはすごく辛かった。勉強も遅れたし、進路も自分が思うような進路にはつながらなかった。でも、あのときの時間があったから、自分のことを見つめ直すことができた」とか。あるいは、「あのときはすごい苦しい時間を過ごした。あの苦しい時間があったから、私は人に対して優しさを感じられるようになったと思う。自分が苦しかったから、人にも優しくすることができている」ということを語る子もいます。さらに、「2年間ひきこもっていて、自分の人生の時間が止まる、そういう2年間だったけれども、あの時間があったからこそ、いまの自分がある」と。何か具体的に「こうだ」とは言わないけれども、あの時間があったから、いまの自分があるということをはっきりと語ってくれる子もいます。

そういう意味では、不登校は失うものもあるんです。夢ばかりではなくて、希望ばかりではなくて、やっぱり不登校したことで勉強が遅れるとか、進路が思うようには行けなかったとか。あるいは、こんな子もいました。文科省の、中3で不登校した子の5年後、20歳になったときに調査をするという研究にも加わったことがあるのですが、その子たちの意見を聞いていて、

わりと多かったのが、20歳になって「中学校のときのことを振り返って、不登校をどう思うか」と言われたとき、「決して後悔はしていない」と。「ただ、成人式があって、成人式に行きたけれども、そのときに共有できる思い出がなかった。それが辛かった」と。他の子は、出会ったら、「ああ、あのとき楽しかったよね。中学校、こんなことあったね」とか「修学旅行、こうだったね」とか思い出話ができるんだけど、不登校をしたことで、そういう思い出話がないと。それが辛かったという意見もありました。

私は、不登校することを全面的に肯定するつもりはありません。もちろん本人も苦しいし、親もしんどいし、失うものもあったと思います。でも、このデータを見ていると、決して一生そう思うのではなくて、その後の出会いによって、その後の生き方によって、その子自身が、変えられない過去なんだけれども、その過去の意味付けの仕方とか、そこにどういふプラスの意味を自分で解釈するか、捉え方を変えることはできるということを、この結果から読み取りたいと思っています。

もう一つ、「将来への自信」という項目で、例えば「自分の将来は明るい」とか、「自分は将来切り開く自信があります」とか、「自分の将来には夢があります」とか、前向きな将来像、将来展望の明るさや暗さを測る項目もやっていたいただきました。その結果、不登校という過去をプラスだと考えられている子は、将来展望も明るい。マイナスだと思っている方は、やっぱり将来展望も暗いということが分かりました。

これらから何を読み取るかということですが、不登校という過去が今を決めるのではなくて、今の在り方が過去への認識、過去への捉え方を変える。さらには、今の自信が変わることで、将来への展望も明るくなる。それが今回のデータから、私が読み取りたいと思うことです。このデータが修論とかで出てきたら、もうちょっとデータを加えないとそこまで言えないよと、たぶん指導するだろうなと私自身も思っています。因果関係は言えないのですが、カウンセラー

としては、子どもたちにそういう思いで出会いたいなと思っています。と言いますのは、臨床をやっていると、いろんな過去を背負った子に出会います。不登校だけではなく、よくこんな悲惨な生活歴を持って、ここまで成長してくれたなという子も出会ったりもします。そういう子が、この後もずっとしんどい状態を背負って生きていくとなったら、こちらもすごくしんどくなります。でも、その子どもたちが、その後、生きていく中で、何かいい出会いがあって、その子が幸せだなという状態になったときには、自らのしんどい歴史に対する見方を変えてくれるかもしれない。「しんどいことも自分には意味があったんだ」、「あのとき苦しんだから、今があるんだ」というふうに思い直してくれるかもしれない。それができたら、きっと将来も頑張って生きていこうと思えるだろうなど。過去は変えられないけども、今は変えられる。出会いの中で、教育という力を通して、あるいは、カウンセリングという力を通して、今の子どもたちの状況を変えることで、過去が変わるかもしれない。さらには、未来も変わるかもしれない。今やっている仕事の意味も、その辺にあるのかなと思っています。

最後に、私が院生のときに、不登校の子が通っているフリースクールで、4年間実習をさせていただいたのですが、そこで出会った不登校の子がしゃべってくれた内容をお話します。その当時、その子は中2だったのですが、今は大人になって、お母さんになっています。その出会いがあってから20年くらい後に開いた同窓会で出会った時のことです。みんなお母さんになっていたり、男の子で「不登校の子の支援員をしています」という子もいたりとか、それぞれに頑張ってくれているなというのを実感しました。当時、中2だった女の子がしゃべってくれた内容です。その子とどんな話をしていたか前後の脈絡は覚えていないのですが、その子があるとき、「先生。私、学校という長い長いロープの先を今握っているねん」という話をしたんですね。当時、その子は不登校の状態で、学校

の先生が時々家庭訪問に来たりとかしてくれていたんですが、なかなか学校には行けない。私が実習に行っていたフリースクールに通って来てくれていたとしました。「学校という長い長いロープの先を今握っている」と言うから、ロープには、もう一つ先があるわけで、「そこは誰が握っているの」と聞いたら、「学校の先生や、担任の先生や」と言うんです。ああ、そうなんだと思って、何を言うのかなと思って聞いていたら、「先生が“学校においで”と言って、ロープをぐいぐいと引っ張っても、今の私は学校には行けない」と。「先生が嫌いだからじゃない。先生に会って、“明日おいでや”と言われても、行けるわけじゃないし、先生が電話をかけてくれて、その電話に出ても何も言えないから、先生には会えない。電話にも出られない。だから先生がロープをぐいぐいと引っ張ったら、今の私は、それが怖くてロープをぼいっと放しちゃうだろう」と。その子がロープを放したら、当然、ロープはだらんと垂れ下がって、先生の手にはしかロープが残らなくなりますよね、それは違うと。逆に、その子がロープを持っているんだけど、「先生のことが嫌だ、先生に会いたくない、先生に来てほしくない」という、その言葉を先生がうのみにされて、「分かった。じゃあ、もう行かない」と言ってロープをぼいっと放したら、今度はその子の手にはしかロープが残らなくなって、だらんと下がってしまう。それも違うと言うんですね。「じゃあ、どうしてほしいの」と聞いたら、その子が言うには、「今すぐには会えないけれども、自分が元気になったらロープをつんつんと引っ張るから、そのときにしっかり引っ張り返してくれるとか、会いに来てくれるとかしてほしい」と言ったんですね。私は当時、そんなに勉強していなかったし、その子の言葉がよく分からなくて、「ふうん」と聞いたんですが、後からよく考えたら難しい要求だったんだなと。長い長いロープの先で、顔も見えないかもしれない長いロープの先を、いつ引っ張られるか分からない、その子の“つんつん”を常に待っておいてくれということですよ

ね。その“つんつん”と引っ張ったときに、しっかりとそれを感じ取って会いに来てほしいというのが、その子の本音です。それを聞いたとき、本当に難しいなと感じました。でも、もしかしたら不登校であるにかかわらず、今の子どもたちは、結構1対1の関係を求めますよね。先生に対しても、親に対しても、いろんな人に1対1の関係を求めます。そういうときに、自分の方を引っ張り過ぎても困るし、引っ張られ過ぎても困るし、放されても困るし、自分のことを忘れないで、ちゃんと感じながら持つておいてということなんです。すごく難しい要求だなと思って、今は感じています。たぶんクラス担任を持っておられたら、40本近いロープが手にあると思います。一本一本、引っ張り方が違いますし、子どもによって引っ張り時も違うし、びいんという張り方も違うと思うのですが、その40本のロープの手加減を探りながら、顔が見えなくても、一人一人の存在を忘れずに持ち続けてくれというのが、この子が語りたかった言葉なのかなと。今もいろんなケースに出会っていますが、不登校のケースなど、「今日はちょっと引っ張り過ぎたよな」とか、「最近、ちょっとたるんでいたな」とか。そういうかたちで自分と相手との関係を考え直すときに、このロープのイメージは結構使えると思っています。今日はいろんな立場の方が来てくださっているかなと思いますが、先生としての子どもの関係もそうですし、カウンセラーとしてのクライアントさんとの関係もそうでしょうし、親と子の関係、いろんな意味で引っ張り過ぎず、でも、放さずという。いつ“つんつん”が来るか分からないけれども、それをしっかりと感じ取るかたちで持ち続けるということが、不登校に限らず、すごく大事なことかなと思って、最後に付け加えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。